

クモの幼体の記載 1

イナズマハエトリ, オスクロハエトリとヒメグモの出のう幼体

池田博明*

Some Spiders' Nymphs (1)

Hiroyoshi IKEDA*

ほぼクモ相が分かっている地域で、幼体にめだつた特徴があれば、幼体でも同定できる種がある。では、具体的にそれはなんなのか、その幼体にはどういう特徴があるのかと問われると、うまく答えられない。なにごとにも経験を積みれば次第に分かってくるものだろう。しかし、経験を普遍化し、勘といわれるものを顕在化して、同好者共通のものとするのが、大切な仕事だと思う。

母グモと卵のうを採取すれば、やがて種名の確かな出のう幼体（通常は2齢幼体と見なされる）を得ることが出来る。そこで、私はそのような機会を出来るだけ生かして、幼体の記載を行いたいと考えている。幼体の原色図の試み（小松, 1936; ハナグモ）や、飼育して脱皮する度に幼体を描図・記載した例もある（小野, 1975; クサグモ雄の成体から-5齢: 赴 et al. 1979; ヤホシヒメグモの1齢~4齢）。幼体図鑑の試みについては既に行った（池田, 1989b）。谷川明男氏は接写による記録を薦めて下さった。できる範囲でそれも努力するつもりである。

出のう幼体はまだ卵黄をたくさん持っていて、種毎の色彩の変化に乏しいので、欲を言えばもう1回脱皮したところが集められればいいのだが。

素性の明らかな幼体をお持ちの方は参照させていただければ有り難い。

今回はイナズマハエトリ, オスクロハエトリ, ヒメグモの出のう幼体（共に多分2齢）を記載する。イナズマハエトリとオスクロハエトリの試料を提供して下さったのは前川隆敏氏である。また、ハエトリグモに関しては、今後ともBOHDANOWICZ and PROSZYNSKI(1987)の論文「日本のハエトリグモ」を分類的解説として適宜翻訳して紹介する。

イナズマハエトリ幼体 *Icius vulpes* nymph as emergence (図1参照)

所検標本: 1991年9月17日採（出のう後約1ヶ月経過した幼体である）。母グモは神奈川県大和市泉の森産（7月7日採集, 7月24日産卵, 8月4日ふ化, 8月中旬出のう。前川氏による）。

測定: 体長1.49mm, 背甲幅0.56mm, 背甲長0.76mm, 腹部幅0.54mm, 腹部長0.70mm.

*神奈川県立青少年センター

*Kanagawa Prefectural Youth Center

形態：背甲・腹部とも平たい。

色彩：一見，背甲部は黒く，腹部は白く見える（白と言ってもやや淡い黄色味がかった白色である。これは他種にも言える）。背甲は黒褐色で，腹部背面は白色で所々やや黒い縞があるが，腹部腹面は一面白色であった。歩脚は白色だが，各脚の付節末端と，次に記す部分は黒い（第3脚膝節末端，第4脚膝節末端・脛節末端）。

成体との比較：腹部背面のイナズマ模様は後端ではそれらしく見えないこともないが，明瞭ではない。成体では白毛がイナズマ紋を作るが，幼体ではそのような白毛はない。

生活史：成熟期は4～5月と9～10月。袋状住居内で越冬する（千国，1989）とされるが，所検標本の母グモは7月～8月の成体だし，（9月現在も生存），東京蜘蛛談話会の記録では7月の夏期にも成体が採集されている。広く分布することも考慮すると，千国（1989）の成熟期は地域的なものだろう。

分類的解説（BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI,1987を訳注を付して抄訳した。訳注は〔 〕内に記入）：BOESENBERG et STRANDが「日本の蜘蛛」（1906）で，佐賀県〔金刀比羅神社〕産の1雄で記載したクロカネハエトリ *Euophrys breviaculeis* と山形県羽黒町産の2雄で記載したイナズマハエトリ *Euophrys undulatovittata* は共に *Attus vulpes* GRUBE,1861 と同種と見なされる。イルクーツクやウスリー地方のものと差はない。〔「日本の蜘蛛」の *Breda lambda-signata* がイナズマハエトリとされ，*E. undulatovittata* はクラオキネコハエトリとされていたが，八木沼（1961）により，前者は後者のシノニムとされた。しかし，松本（1977）により *Euophrys* 属のタイプのカタオカハエトリとは，背甲の高さや第1脚の装飾毛などがかなり異なることが指摘されていた〕

Icius 属はSIMONが1876年にたてた属だが，研究者により異なった扱いをされてきて，紛糾してきた。この属の多くの種を検討したANDREEVA et al. (1984)は *Icius* 属と *Pseudicius* 属（1885年にSIMONがたてた）を分けるはっきりした差がないとした。属徴は雄では触肢脛節突起が二枝であること（稀に痕跡的に一枝），雌では単純な例では外雌器に短い受精管を備えた単純なバッグ型貯精のうを持つことだが，旧世界の既知種・未記載種の間には大きな変異があった。しかし，ひとつの属にまとめようとする傾向にある。割に低く，平らで長い背甲部，特徴的な腹部斑紋など，見えそうな標徴がある。また，この属の数種だけではあるが，側方の眼の下に並んだ剛毛（または刺毛）を備えた1列の硬化したwarts（何を指すか不明）がある。本属の範囲を確定するのは将来の課題である。

分布：ソ連（BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI,1987），北海道を除く日本（千国，1989）の他，韓国・中国に広く分布する（KIM,1991；朱，1983）。ウスリーやイルクーツクに分布することから，今後，北海道でも記録されるのではないのか。

オスクロハエトリ幼体 *Marpissa magister* nymph as emergence (図2参照)

所検標本：1991年10月1日採。母グモは神奈川県海老名市産（9月30日採集，卵のうとそれか

ら出のうした幼体68頭を守っていた。前川氏による)。

測定：体長2.11mm，背甲幅0.70mm，背甲長1.14mm，腹部幅0.60mm，腹部長1.08mm。

形態：背甲・腹部とも平たい。

色彩：背甲部と第1脚脛節から先は淡アメ色，腹部と他の歩脚はイナズマハエトリ幼体よりもやや黄色味のある白色で，腹部背面には中央に黒い線があるほか，左右にも不連続な黒線があり，腹側にも黒点が散在する。背甲背面の黒い部分は図の通りである。腹面は胸板も腹部も白い。

成体との比較：全体の体形は成体に似るが（腹部長の割合が小さいものの），斑紋はかなり異なる。雄の幼体については千国（1989）に写真と解説がある。

生活史：成熟期は6～8月（千国，1989）とされるが，神奈川県海老名市ではもっと遅く，9月下旬に雄成体が雌垂成体と同居し，雌の最終脱皮を待って交尾する（前川，私信）。

分類学的解説：ベルリンの動物学博物館にある本種のタイプ標本 [*Icius magister* KARSCH, 1879] は未熟な1雌で正しく同定できない (PROSZYNSKI, 1973b)。BOESENBERG et STRAND (1906) が同定し記載した佐賀県産4頭の雌がカルシュの原記載を最初に当てはめた資料とみなしうる。残念ながら，その標本には別種が混在しており，少なくとも2種，オスクロハエトリとヤハズハエトリがある。

Marpissa 属は，C.L.KOCH が1846年にたてた属で，模式種は *Marpissa muscosa* (CLERCK, 1758) である。雄の触肢の胚葉の側面が平たいことや，雌の外雌器の複雑なコイルが特徴とされた。この属は二群に分かれ，属が分けられることもある。真の *Marpissa* (オオハエトリ *M.dybowskii*，ヨダンハエトリ *M.pulla* その他) は幅のある平たい腹部や周囲を栓子に囲まれたバルブを持ち，胚葉はかなり幅広く通常わん曲している。第2群は (ヤハズハエトリ *M.elongata*，オスクロハエトリ *M.magister*，シナノヤハズハエトリ *M.pulchra* その他) はほっそりした腹部や短い栓子，中央の隆起によって分離された2個の窪みから成る外雌器が特徴である。受精管は密な結び目を作る。後者の群は *Hycitia* や *Mithion*，*Icidella* などと名付けられた。これらの属名のうち，最初の二つの使用には長所がある。*Marpissa* に対して *Hycitia nyvoyi* の関係は今後も研究を要する。南欧で知られた *Mithion canestrinii* は明らかに *M. magister* と同属であり，近縁種である。両群は大変に近く，北米や旧北区と連続した鎖を構成する。これらをひとつの属と呼ぶことは相互の関連を強調するものだ。同定の標徴の記述では悩みを生ずるもの。SIMON が1884年に建てた *Mithion* の模式種は *M.semiargenteus* だが，実際のところ1885年にSIMON が建てた *Thyene* 属に所属する。他には *Mithion* に属する種はないのだ。*Mithion* という属名は1年早いものの *Thyene* 属 (3大陸にわたりたくさんの種を含む) のシノニムとすべきだろう。別の選択，*Thyene* 属のすべての学名の変更は大変な命名上の混乱を引き起こすだろう (以上，BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI, 1987より)。

[*Mithion* (→*Marpissa*) *canestrinii* NINNI の幼体腹部背面図や雌雄の生殖器の図はオスクロハエトリのそれと大変よく似ている。また二人は1966年6月25日に菅波洋平氏が茨木で採集した1雌で，*Marpissa ibarakiensis* を記載しているが，これはシナノヤハズハエトリに酷似しており，最も重要な差異は，外雌器の内部構造にあるという。しかし，図からはオスクロハエトリとも似ており，変異の範囲内とも見なせる。標本の状態がよくないそうで，新鮮な標本でさらに検討を

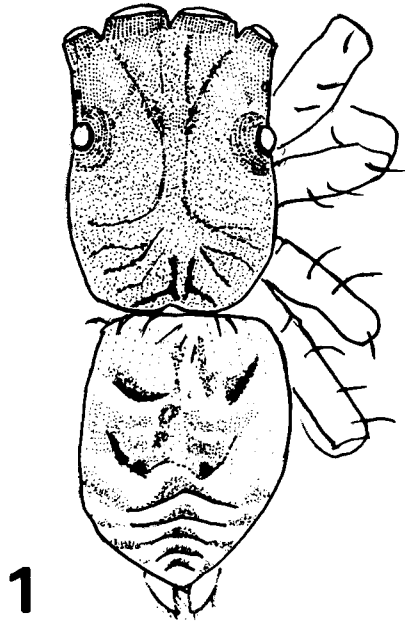


図1. イナズマハエトリの出のう幼体

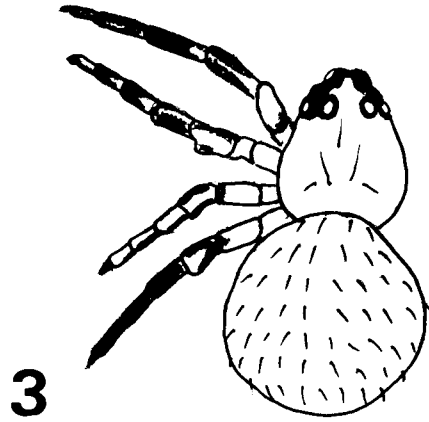


図3. ヒメグモの出のう幼体

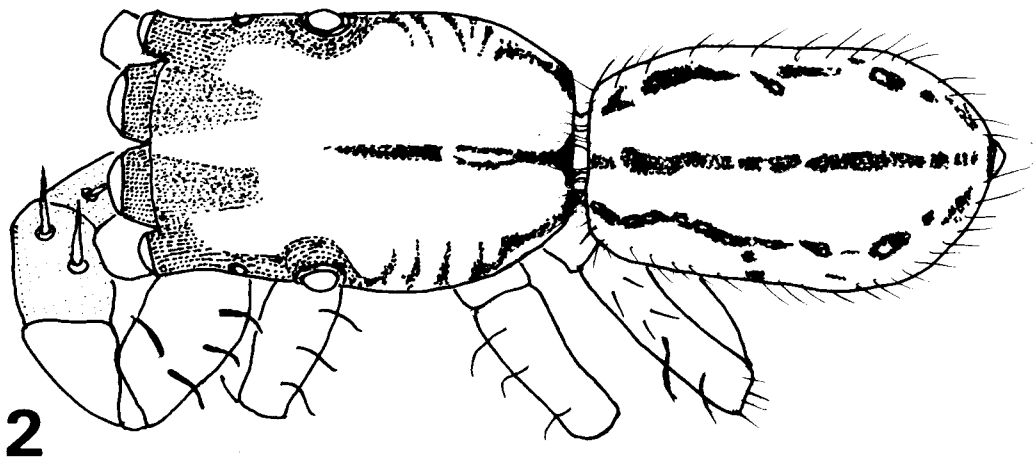


図2. オスクロハエトリの出のう幼体

(スケールは0.2mm)

要するという。日本の *Marpissa* 属数種の関係が整理された経緯は既にかいた (池田, 1989a)]
分布: 本州 (中・南・西部), 四国, 九州 (千国, 1989) の他, 韓国・中国に広く分布する
(Kim, 1991; 朱, 1983)。

ヒメグモ幼体 *Achaearanea japonica* nymph as emergence (図 3 参照)

所検標本: 1991年9月18日採; 母グモは小田原城内高校産 (1991年7月29日採集, 9月3日出
のう)。

測定: 体長0.86mm, 背甲幅0.35mm, 背甲長0.40mm, 腹部幅0.49mm, 腹部長0.48mm。

色彩: 背甲・胸板・腹部背面腹面などすべて黄色, 歩脚は膝節より先が黒色だが, 第3脚は黒
色部分が少なく, 特にその腹面は黒くなっていない。

成体との比較: 成体も後期幼体も脚先が黒い。この特徴は他の類似種コンピラヒメグモやキヒ
メグモとの区別点となる。成体の場合は第1・2脚は脛節基部から先, 第3・4脚は脛節末端か
ら先が黒い。幼体の腹部背面には成体のような黒点紋様はない。頭部や背甲の形態や眼の配置は
成体のものに類似している。

生活史: 神奈川県小田原市では, 産卵は主に8月中下旬だが, 早い個体もある (池田,
1990)。出のうは早いものでは8月中旬, 主に9月になる。Iro (1985) によると, 出のう幼体
は母親がかんだ餌をもらい (11月中旬から約3週間, ただし奈良市), 脱皮せずに分散, 越冬す
る。

分類学的解説: 「日本の蜘蛛」 (1906) では, 佐賀県佐賀郡富士町湯ノ原 (ユノハルと読む) 産
(Yunohama-Berge と記されている) の雌雄 (1881年5月29日デーニッツが採集) で, *Theridium*
japonicum として記載された。小松栄 (1936) は本種をヒメグモと記している。校閲者の岸田久
吉がそう称していたのだろう。齊藤三郎 (1941) はコンピラヒメグモを「ミツクロボシヒメグ
モ」とし, 本種を「ミツシロボシヒメグモ」と称したが, 現在は両種とも八木沼 (1953) が選ん
だ和名が使われている。

Theridium から *Achaearanea* が出来た経緯は八木沼 (1955) に記されている。吉田哉 (1984) が
Achaearanea に転属した。

分布: 日本全土のほか台湾・韓国にも分布する (朱, 1983; Kim, 1991)。中国にも分布する
ほか, 東南アジアの *A. mundula* に近似し, 地理的変異の可能性もある (吉田, 1984) という。普
通種だが, 八木沼 (1952) 以前の各地の目録には, ほとんど本種に該当する種名が挙げられてい
ない。

引用文献

BOHDANOWICZ, A., and J. PROSZYNSKI, 1987. Systematic studies on East Palaearctic Salticidae (Araneae), IV. Salticidae

- of Japan. *Annales Zoologici*, 41(2):43-151.
- 千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 309p. 偕成社. 東京.
- 池田博明, 1989a. 似てない夫婦. (IN 梅谷献二・加藤輝代子編「クモのはなし I」, p.9-17. 技報堂出版).
- 池田博明, 1989a. 似てない親子. (IN 梅谷献二・加藤輝代子編「クモのはなし I」, p.18-26. 技報堂出版).
- 池田博明, 1990. ヒメグモの生活史覚え書き. *Heptathela*, 4 : 11-16.
- Iro, C., 1985. Brood-care behaviour in *Theridion japonicum* observed at a laboratory. *Acta arachnol.*, 34:23-30.
- Kim, J.P., 1991. A check list of Korean spiders. *Korean Arachnol.*, 6:275-291.
- 小松栄, 1936. 原色日本蜘蛛類図説. 蘭山会.
- 松本誠治, 1977. 湯ノ原および金刀比羅神社(佐賀県)のハエトリグモについて. *Atypus*, (69) : 3-15.
- 小野展嗣, 1975. クモの生活史研究の問題点及び齢期記録の一方法. *Kishidaia*, (39) : 49-54.
- 齐藤三郎, 1941. 日本動物分類. No.37.220p. 三省堂.
- 朱伝典, 1983. 中国蜘蛛名録. 白求恩医科大学学報, (9) 増刊 : 1-130.
- 赵敬・文・陳, 1979. 八斑球腹蛛生物学特性的觀察. 昆虫天敵, 25-34.
- 八木沼健夫, 1952. 北山峡の蜘蛛. *Atypus*, (1) : 13-20.
- 八木沼健夫, 1953. 日本産として記録されたクモ. *Atypus*, (3) : 9-20.
- 八木沼健夫, 1955. オオヒメグモの学名. *Atypus*, (8) : 29.
- 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 64図+305p. 保育社. 大阪.
- 吉田哉, 1984. 日本産 *Achaearanea* 属(真正蜘蛛目; ヒメグモ科)の1新種. *Acta arachnol.*, 32 : 37-42.